

補綴歯科臨床における認知行動療法の効果：ランダム化比較試験(RCT)

辻（土井），希美

<https://hdl.handle.net/2324/1806945>

出版情報：九州大学，2016，博士（歯学），課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）



氏 名	辻 希美			
論 文 名	補綴歯科臨床における認知行動療法の効果：ランダム化比較試験（RCT）			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	柏崎 晴彦
	副 査	九州大学	教授	吉浦 一紀
	副 査	九州大学	教授	中村 誠司

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

補綴治療患者に対する認知行動療法の効果やメカニズムについては十分に分かっておらず、そうした報告は皆無に等しい。そこで本研究では、歯の欠損に対して補綴治療を行う患者への認知行動療法の効果について検討した。遊離端欠損に対して可撤性義歯による補綴治療を行う患者 46 名を対象に、介入群（可撤性義歯による補綴治療＋認知行動療法）と非介入群（可撤性義歯による補綴治療のみ）とに無作為に割付し、補綴治療前（Baseline）および治療完了の 1～3 か月後に、咀嚼能力の客観的評価（咀嚼能率、咬合接触面積、咬合力）および主観的評価（咀嚼能力への満足度の評価（VAS）、口腔関連 QoL の評価（OHIP-J））、ならびに心理社会的因子（GHQ60、POMS 短縮版）を測定した。介入群への認知行動療法は、顎顔面領域の筋の緊張を緩和し、歯や歯周組織、義歯床下粘膜への負担を軽減することによって義歯への順応をサポートすることを目的とし、リラクゼーショントレーニング（頭頸部筋のストレッチ指導）および行動変容（日中の上下顎歯の接触についてのセルフモニタリング）を指導した。これを治療開始から義歯装着までの間に同一術者により 2 回行った。その結果、補綴治療前後では両群ともに咀嚼能率、咬合接触面積、咀嚼能力への満足度の評価（VAS）で有意な改善を認めたが（二元配置分散分析, $P < 0.05$ ）、その他パラメーターでは有意差を認めなかった。また、群間の比較では、咀嚼能力への満足度の評価（VAS）（介入群 $44.1 \pm 22.1 \rightarrow 81.7 \pm 12.3$ 、非介入群 $40.0 \pm 21.9 \rightarrow 61.8 \pm 23.6$ ）、口腔関連 QoL の評価（OHIP-J）（介入群 $66.6 \pm 37.9 \rightarrow 39.4 \pm 24.9$ 、非介入群 $69.6 \pm 37.8 \rightarrow 53.6 \pm 29.0$ ）で介入群の方が有意な改善を認めたが（二元配置分散分析, $P < 0.05$ ）、その他パラメーターでは有意差は認めなかった。つまり、介入群の方が患者の主観的評価が有意に向上した。本研究結果より、歯の欠損に対して可撤性義歯による補綴治療を行う患者への認知行動療法は、患者の主観的評価の向上に効果があることが示された。

以上の内容をもって、本論文は補綴治療患者に対する認知行動療法の効果に関する新知見を呈している。従って、博士（歯学）の学位授与に値する。